和 教育学研究科 **佐野真由子先生**





経歴について

興味を持った人間達の動きを追いかけて 見ていく中で、現在の研究に繋がっていった。

「文化政策学」と名乗っていますが、私 は学生時代から色々な分野をかなり自由に 横断しながら研究してきたので、内容を一 言でまとめるのは少し難しいですね。

あえて説明するなら、3つの柱があります。1つは歴史的観点からの文化政策の研究です。私は研究する上で文化というものを非常に幅広く捉えており、したがってこの柱は、日本の近現代史を文化政策史という角度から構築し直す試みと言っても良いと思います。

2本目の柱は、「外交の文化史」です。 より一般的な言葉で言えば、外交の中の文 化交流史と説明するのが分かりやすいかも しれません。元々私は学生時代、国際関係 論を勉強していたんです。でも、国々の動 きを制度的に見ていくというよりは、国際 関係の現場で互いに接触した人間達に関心 がありました。現在は、とりわけ日本の近 代を生きた人達に具体的にフォーカスする 形で、その背後にある国際関係を見ていま す。そのように人間に着目する国際関係史 を、私の先生が「外交の文化史」と呼ぶべ きものだと言ってくださったので、自分で もそう呼んでいます。

そしてもう1つの柱は、現在私が「万博学」と称しているものです。万国博覧会は私が卒業論文の時から扱ってきた対象なのですが、長く研究してくる中で、イベントとしての万博そのものよりも、万博を通じて繋がる事物に関心を持つようになりました。万博を行うための政治的な駆け引き、

経済政策、そしてこれに関わる国の重要人物達はもとより、実際に展示を企画する人、見物人、メディアなど、あらゆるものがこの巨大なイベントを通して繋がっています。それらの要素を見渡し、追いかけていくと、万博という具体的なイベントの向こうに、凄く面白い形で世界の人間達の歴史が浮かび上がってくるんです。その研究の仕方を、今、単に万博を研究するのとは一味違った「万博学」として提唱しています。

これら、いくつかの柱全体を覆う大きな コンセプトが私にとっての「文化政策学」 です。私自身いわゆる文化政策の実践現場 でも長く働いていたので、そういう知見も 取り込みつつ研究を続けています。

一 今の研究テーマにたどり着いたきっかけは何ですか。

最初のきっかけは、学部2回生の時に受 けた岩倉使節団の米欧回覧実記を輪読する 授業ですね。米欧同覧実記とは、明治時 代、足かけ3年かけて欧米を同った岩倉使 節団の公式報告書です。彼らは 1871 年か ら73年にかけて米欧諸国を歴訪しました が、73年、旅の終わり間際に訪れたオー ストリアのウィーンで、万国博覧会をやっ ていたんです。初めて日本が参加した万博 は 1862 年のロンドン万博、つまり江戸時 代の終わりでした。明治時代に入ると、万 博は日本にとって非常に大切なものになり ます。世界中の人々が集まるので、そこに 何らかの出品をして、日本を魅力的な国だ と思ってもらい、不平等条約の改正にもつ なげたい。そのような目的のもとで、国の トップにいる人達が本当に真剣に準備して

参加するイベントだったんです。73年のウィーン万博はそんな明治政府が初めて参加した万博で、岩倉使節団は重要な万博を生で見たわけなんですよ。米欧回覧実記には、ウィーン万博について、今まで国々を巡回してきた後で良い復習になったとか、自分達の国の出品が高く評価されたとか、色々なことが書かれています。

その米欧回覧実記を輪読する授業で、私は全体の中でもこの万博の箇所に強く惹かれたんです。学期の終わりにこの箇所をまとめたレポートを提出したら、先生が学生を励ますのが上手な方で、褒めてくださったものですから、すっかりその気になってしまって……。その後は様々な授業でレポートを書く機会に、それぞれの角度から万博を取り上げるようになりました。その結果、万博が卒論のテーマになりました。

万博は今思うと日本や世界の歴史を考える上で非常に良いベースになる素材だったので、その時出会えたことはとてもラッキーでした。その後は、1862年の万博の際、江戸幕府に参加を促したイギリス人外交官ラザフォード・オールコックの研究で修士論文を書きました。博士論文では、そこから少しテーマを展開して、江戸時代末期、オールコックらに対した日本側の幕臣達が、諸外国と対等に渡り合うための外交上の儀礼を検討し、確立していった過程を研究しました。

ですから、私の研究のおおもとになった のは米欧回覧実記ですね。その後興味を持った人間達の動きを追いかけて見ていく中で、現在の研究に繋がってきたのです。





文化政策について

文化政策とは、人間の営み 全般を動かす政策を指す。

- 「文化」は広い意味を持つ言葉です が、研究をされる際にどのように捉えられ ていますか。

「文化」は色々な人が色々な時に色々な 意味で使っている言葉ですよね。もちろん 学問的な定義を試みてきた人達はいます。 それはそれで重要なことですが、私自身は それ自体を延々と議論することにはあまり 関心がありません (笑)。多義的なものだ と分かっていればいいんです。日常的には 文学や音楽などの芸術活動を指して「文化」 と呼ぶ場合が非常に多いですよね。もちろ んその言い方も否定しないのですが、私自 身は「文化」というものを、人間の生活様 式や思考のあり方、関係の作り方全般とい う風に、最広義に捉えています。

「文化」は色々なレベルで形成されます。 例えばサークルの文化、町や村の文化、国 の文化……といった具合に。いずれにせよ 何らかの集団が前提であり、一人一人の個 性とは次元の違うものです。研究をする上 では、「文化」という言葉を、ある集団の 中で緩やかに共有されていて、何らかの特 性があると考えられるような意味での生活 様式、思考のあり方、関係の作り方、人間 の営み全般であると定義しています。

では、先生にとって「文化政策」と はどのようなものなのでしょうか。

私は、人間の営みに影響を与えようとす る政策全般だと捉えています。悪い例です が、1930年代後半から40年代にかけて 行われていた思想統制は文化政策の一種で す。これは人々の心の持ちようや、牛活の あり方に影響する政策として典型的です。 ただそれだけではなく、文化政策とは人々 の営みを方向づけること全般を指し、実は 経済でも農林水産でも、縦割り行政では分 かれてしまっている全ての領域が関係する と言ってもよいのです。よく巷で言われて いるようなアーティストの支援とか、ある 美術展の開催の是非とか、そういうことだ けが文化政策だと思われがちなのですが、 それは話が狭すぎると私は考えています。 もちろんそれも文化政策の一部ではあるの ですが、その部分だけではないのだという スタンスを私はとっています。

――先生が掲げていらっしゃる「大きな 文化政策学」とはどのようなものなのでし ようか。

最初に批判から入るのですが、現在「文 化政策」と言うと「どうやって文化庁の予 算を大きくするか?」「美術館を支援すべ きか?」といった議論ばかりなんですね。 それは無駄な話ではありませんが、あまり にも狭い捉え方だと思っています。そうな った1つの原因として、1990年代から日 本の公的な予算による芸術支援が始まった のですが、並行して、そうした公的支援を 正当化することに焦点を当てた文化政策論 が盛んになったということが挙げられま す。音楽や美術が大事だという結論ありき で公的支援の必要性を説くことが、文化政 策論の役割のようになってしまいました。 もちろん私も音楽や美術が大事であること に異論はありませんが、その風潮の中で政 界と芸術・学術界が双方影響し合い、議論 を小さな枠に押し込めてしまったと私は見 ています。

しかし近代以降の歴史を振り返ると、例 えば文明開化という言葉で括られる全ての 社会改革は、「明日の日本の文化をどうし たいのか?」「どうやって生きていきたい のか?」という議論にほかなりませんでし た。それらは当時は「文化政策」とは呼ば れていなかったけれども、私は広い意味で の文化政策そのものだったと考えていま す。歴史の研究と現代社会での色々な活動 とを両立してやってくる中で、私は「文化 政策」を今の狭い捉え方から解き放って考 えましょうということを提唱するようにな りました。それが「大きな文化政策学」で す。これは自分自身の学問的スタンスであ り、一種の運動でもあり、私が時間をかけ て構想していきたいものを指す言葉です。

-研究対象はどのように探していらっ しゃるのでしょうか。

どの分野でもそうだと思いますが、ある ものを研究していたら、その一角に次の焦 点になる部分が見えてきて、じゃあ今度は そこを中心に研究しよう、といった具合に、 じゅずつなぎにテーマが展開するのではな いかと思います。

例えば私の万博学にしても、もともとは 幕末明治期の日本が欧米の万博に参加した 経緯を研究していくうちに、「その万博自 体はどういうものだったのか?」というこ とをもっと知りたくなったんですね。そこ で当時の万国開催国、特にイギリスに残さ れていた資料を一生懸命読んだのですが、 そうすると日本も、中国も、ヨーロッパ諸 国も、全ての国がそれぞれの事情で万博に 臨んでいた様子が見えてきました。一国の



参加だけでなく、それらを横に並べてみると非常に面白いことが分かりました。さらに開催国側の意図や、万博と万博の間に行われる国々の駆け引きなどを調べていくと、全然違う世界が見えてきました。

1つ具体的なテーマの話をすると、以前 の万博では「非文明」の有様を衝撃的に提 示することが行われていました。先進国は 植民地の人達を連れてきて、人間のまま展示するという酷いことをやっていたのです。でも今の万博ではそんなことはしないですよね。「ではいつ誰がどうやって止めたのだろう?」と思って追いかけていくと、1967年モントリオール万博、1970年大阪万博にたどり着きました。あの頃からなんですよ、植民地を万博で扱ってはいけな

いという理解がようやくできてくるのは。 それは実は誰も研究していなかったテーマだったんです。元々植民地展示が当たり前だった19世紀の万博を研究していたことがベースになって、今、万博から植民地の展示が無くなっていくところに関心を持っています。研究上の興味というのはそのように展開するものだと思います。

COLUMN 佐野先生の著書から



「万博学/Expo-logy 創刊号」 佐野先生が代表を務める万博学研究会が、最新の研究成果を毎年発信。昨年 12月発行の創刊号では「植民地なき世界の万博」と称し、植民地と万博の関係を扱った論稿や座談会を掲載している。



「クララ・ホイットニーが綴った明治の 日々」

クララ・ホイットニーは、14歳の頃に 家族とともに来日したアメリカ人女性で ある。彼女の日記から、外国人の視点か ら見た明治時代の日本を考察する本。



京大について

変わることを恐れず自分の可能性を広げる。 京都を拠点にしつつ、京都に安住しない マインドを育てる。

一京大の魅力は何でしょうか。

京大での経験がまだ長くないので、ピントが合っているかどうか分からないのですが、京大生は「私が日本を引っ張っていかなきゃ」「経済界を引っ張っていかなきゃ」みたいな雰囲気があまりないですよね。良い意味でふらっとしています。自分の好きなことを好きなようにやっている感じがして、そこが良いところだと思います。

あとはちょっと平凡だけれど、京都とい うバックグラウンドがあるのは強みです ね。かけがえのないものだと思います。

これは学部生向けガイダンスなどでもよ く言うことなのですが、意識して自分の枠 を広げてほしいと思っています。これには 2つの意味があるのですが、1つには、京 大の場合は専門を決めてから入学するから か、自分の将来を決め急いでいる人が多い 印象があります。受験する学部学科を選ぶ 際に、みなさん相当考えていらっしゃると 思うんです。それはプロセスとしては悪い ことではないのですが、そこで決めたこと を途中で変えようとしない方が多い印象を 私は持っています。18歳で方向を固めて しまうのは早すぎです。これから先、他に も面白いものに出会ったり、興味が完全に 変わったりする可能性だってあるわけで す。ひたすら教養を積んで、自分を開拓し ていくことに時間を使えるのは大学生の特 権なので、変わることを恐れず、どんどん 自分の可能性を広げてほしいと思います。

もう1つは京都の殻を破るということです。京都は世界に全くないくらい素晴らしい場所です。歴史の厚みがあって、見る所もたくさんあり、そこにいるだけで相当充実した暮らしができます。でも、だからこそ、ここにいるだけで世界が見えているわけではないということを常に自覚してほしいです。京都を拠点にしつつ京都の殻を破る。京都という素晴らしい街を拠点としながら、京都に安住しないマインドを育ててほしいと思います。それら2つの意味で自分を広げてほしいと思います。

―――貴重なお話をいただきありがとうご ざいました。

